



続 謙澄を巡る人々

その2

題字
棚田看山

行橋市前田に「末松謙澄生誕之地」碑がある。昭和五十五年（一九八〇）建立。碑面は、評論家江藤淳の揮毫した字だ。謙澄は豊前国前田村の大庄屋・末松七右衛門の四男として安政二年（一八五五）に生まれた。郷土の私塾・水哉園をでて明治四年（一八七一）に上京。東京日日新聞に入社、文才を發揮。伊藤博文に認められて官界入り。活躍めざましく駐英公使館書記見習として渡英、ケンブリッジ大に入学、明治十五年に『源氏物語』を英訳出版した。帰国後、内務・文部省に勤め、博文の長女（生子）と結婚。謙澄は生涯、新聞記者、翻訳家、外交官、官僚、政治家、歴史家として八面六臂のマルチ人間として活躍した。

彼が明治三十一年に第三次伊藤内閣の通信大臣就任の折、稗田村の鶴崎茂村長に宛てた手紙がある。

豊前国京都郡稗田村 鶴崎茂殿
 謹啓、春気相催候處、各位愈御清祥ト致香賀候、陳は、謙澄儀今回乏ヲ国務大臣ノ末ニ承ケ候處、各位我郷ノ光荣トシテ祝意御表可被下趣御申越、過当之詞章、敢テ當ル所ニ無御座候得共、同郷之各

稗田村村長 鶴崎茂への大臣の手紙

位謙澄ノ為メ、此之御催有之候段、奉謝候、然は薄識之身ニ候得共国家ノ為メ夙夜励精、各位之清望ニ負力サラシテ期可申候、粗酒進呈ノ印迄、為替券壹葉（参拾圓）封入候間、御受納被下度候
 頓首 二月十七日 末松謙澄
 稗田村有志 村長 鶴崎茂 外
 諸君 御中

大臣になった報告と日夜、国家のために励む覚悟を村民に伝えて欲しい旨の手紙である。昔の人は、こうした手紙や葉書などで近況を家族や地域の人に伝えていたようだ。一二四年前の「大臣の手紙」は、当時の村民に多くの喜びと期待を抱かせたであろう、往時が偲ばれる。

ところで、いま、下稗田にある鶴崎茂村長の墓には「何人も見る権利あり今日の月」の名吟を残す日本法曹界重鎮といわれた「法学博士花井卓蔵書」と今上天皇「浩宮」命名者である漢文学者の「東京帝国大学教授文学博士宇野哲人撰書」両氏の名が刻まれてある。郷土には、歴史の夢ふくらむ遺産が眠っているものだ。

文化人 末松謙澄を考える会
 光畑 浩治